

地域（八街市）に貢献し、地域（八街市民）に愛される県立学校を目指して

県立八街高等学校

1 地域貢献の目的（課題）

（1）本校の現状（県内最初の総合学科設置から現在まで）

本校はJR総武本線榎戸駅の南方1.5キロに位置し、近くには落花生、しょうが、さといもなどを栽培している広大な畑が広がり自然豊かな環境に恵まれた場所にある。

本校は平成9年4月に普通科4学級、商業科2学級を募集停止とし、本県最初の総合学科の高校として6学級でスタートした。平成14年度には情報ビジネス科1学級、国際経済科1学級を募集停止とし、全日制総合学科7学級となった。総合学科スタート当時は、登下校時に地域住民からの苦情も多く、地域から信頼される学校とはいえない状況であった。この状況を改善しようと、登下校時、校門指導を始め、全教職員が遅刻する生徒、服装が乱れている生徒に対し積極的に声かけをし、服装や生活習慣を改善するように指導を積み重ねていった。その成果が徐々に現れ、現在は「八街高校はよくなった」「生徒も元気に挨拶してくれる」といった地域からの声が聞かれるようになった。

現在は生徒減少により、一学年7学級から平成24年に6学級、平成25年に5学級、平成30年に4学級と徐々にクラス数が減少している。

全校約440人の生徒は、明るく素直な生徒が多く、1年次には基礎学力の定着を目標とし、総合学科の必修科目である「産業社会と人間」で、将来の進路について考える授業を行っている。2年次からは人文・自然・生活・商業・情報といった5つの系列に分かれ、専門的な学習に励んでいる。

学校行事は、1年次「産業社会と人間」の中で、「大学・企業体験学習」を行い将来の進路決定に向けて、実際に大学・企業の様子を目にすることで自分事として進路を考えさせている。また、一生の思い出となる2年次の修学旅行は沖縄県に行くことができた。さらに、3年次は「総合的な探究の時間」で各自進路に関する内容について調べたものを、全校生徒の前で発表する「全校発表会」を実施するなど多彩な行事も行っている。

（2）地域貢献の目的

本校が地域貢献に取り組んだ目的は、2021年6月に八街市で児童5人が死傷した悲惨な交通事故が起こってしまったことが契機である。本校の生徒も通っている通学路で、飲酒運転のトラックが下校中の小学生の列に突っ込み死傷者が出たことで、多くの生徒が心を痛めた。そこで八街高校工芸科を履修している生徒が、「高校生として何かできないか」と考え、生徒が授業中や放課後に制作した工芸作品の展示販売を行い、収益金を八街市の道路交通安全のために寄付してはどうかという提案があった。これに賛同した工芸選択の生徒約110名が、制作した作品の提供及び販売活動を行うこととな

った。生徒は、地元八街の地域に貢献するため、工芸作品の展示販売を通したSDGsの活動やボランティア活動に取り組んだもので“八街を笑顔で明るい町にする”という取り組みが始まった。

また、毎年、八街市選挙管理委員会や八街市教育委員会・八街市体育協会からボランティア活動の協力依頼がある。八街市選挙管理委員会からは、不在者投票時の受付等選挙事務のボランティア活動で、八街市教育委員会・八街市体育協会からは、「小出義雄杯八街落花生マラソン大会」において行儀記録配付・印刷に関わる大会運営ボランティア活動である。近年はコロナ禍のため、様々なイベントが中止となっていたが、今年度に入りイベントを復活したいということからこのようなボランティアの依頼があった。この機会に高校生がボランティアに参加することで、地域の大人と交流を持ち、コミュニケーション能力を身につけること、また、ボランティア活動を奨励することで、他人のために行動し、自己肯定感を高められるように、高校生の社会参加を奨励することが目的である。

2 地域貢献の成果（生徒の変化等）

工芸作品の販売活動を行うと決めた当初は、取組の中心として活動していた3年生徒4名は、「本当に自分たちの作った作品が売れるのか」、「多くの人が集まってくれるのか」、「私たちが考えて実施しようとしているこの取組が、地元の方々から支援されるのだろうか」など、多くの不安があったと言っている。しかし、令和3年12月15日（水）、16日（木）、23日（木）の3日間、総合スーパー「ランドローム」、「セイミヤ」の2会場で販売実習を行った際に、買い物にきていた多くの方が足を止めてくれて、この取組について話を聞いてくれ、賛同していただき作品を購入してくれた。そのときに、お客さんから「がんばってね」、「作品が上手にできているね」などの言葉をかけられ、生徒たちは「とても自信がついた」、「この取組をやって本当によかった」、「こんなに多くの方があたたかい言葉をかけてくれて本当にうれしい」という声が聞けた。そして、この活動を行った後、千葉日報や朝日新聞社の紙面やネットニュースに自分たちの活動が紹介され、多くの人に周知され、声をかけられることでとても生き生きとした表情をしていた。その結果、生徒達は3月にも販売活動を再度実施しようと考え、令和4年3月15日（火）、16日（水）の2日間、総合スーパー「ランドローム」、「セイミヤ」の2会場で販売実習を行った。

この活動により、他の生徒も刺激を受けたようで、地域に貢献することに対して興味を持つようになった。そして、不在者投票時の受付等選挙事務のボランティアには16名の生徒の参加があった。また、「小出義雄杯八街落花生マラソン大会」の大会運営ボランティアには8名の生徒の参加があり、生徒たちは、ボランティアに参加し、地域の大人と交流を持つことで、自分たちの活動が感謝されることで、自己有用感を高めていった。

3 準備・実施段階の工夫

販売活動を実施するにあたり、この取組をSDGsに関連づけて活動することとし、自分が生きるこの社会の持続可能性についても、考えを深めてほしいと考えた。

SDGs_17の目標の中から、今回は「11. 住み続けられるまちづくりを」、「12. つくる責任、つかう責任」、「15. 陸の豊かさもまもろう」、「17. パートナリーシップで目標を達成しよう」を取り上げて、この4つの目標を、今回の販売活動をより具体的なものにするため、下記のように掲げることとした。

- 11. 「毎日明るく元気に住み続けられる町・八街」を目指す。
- 12. 時間をかけて作った生徒作品を使っていただける市民の方々へお届けする。
- 15. 竹工芸作品を制作し、竹林整備事業を推進する。(環境保全活動)
- 17. 八街市とのパートナーシップ関係の構築。

販売する工芸作品は、工芸Ⅰ（1年次・2年次選択）、工芸Ⅱ（2年次・3年次選択）、工芸Ⅲ（3年次選択）、伝統工芸（3年次選択）の授業の中で制作している作品を販売することとした。

＜工芸作品リスト＞	
<ul style="list-style-type: none">・木工作品（1） （食卓用ナイフ、スプーンなど） 	<ul style="list-style-type: none">・木工作品（2） （カッティングボード） 
<ul style="list-style-type: none">・シルバーアクセサリー （リング、ペンダントなど） 	<ul style="list-style-type: none">・木工作品（2） （カッティングボード） 

制作した作品は、令和3年12月15日（水）、16日（木）、23日（木）の3日間、及び令和4年3月15日（火）、16日（水）の2日間、本校近くのスーパーマーケットである、「ランドロームフードマーケット八街店」及び「セイミヤスーパーマーケット榎戸店」で販売した。販売活動に参加した生徒は、12月は14名、3月は8名であった。12月の活動中は、年末ということもあり、たくさんのお客様がスーパーに来店しており、買い物に来た大勢のお客様から、高校生の活動に対して、あたたかいお言葉をいただいた。



この活動を通して、集まった収益金は、合計102,956円となった。この収益金を八街市へ寄付するために、令和4年3月24日に八街市役所を訪問し、八街市の道路交通安全のために全額寄付した。その際に、八街市長の北村 新司様から本校生徒の活動に対して感謝の言葉をかけてくださった。



4 取組への反響（保護者の声等）

工芸作品の販売活動について、新聞記事の掲載を見た保護者や地域の方からの評価は大変好評である。「昔に比べて、八街高校の生徒は、よくなった」というお褒めの言葉もいただくようになった。

また、ボランティア活動についても八街選挙管理事務所の担当者や、ボランティア当日と一緒に作業していた市役所職員の方から、「積極的に活動してくれるので、とても感謝している」といっていただいている。

5 今後の方向性

工芸作品の販売活動やボランティア活動を通して、地域の方々から「ありがとう」「がんばってるね」等のお声がけをいただき、生徒たちは「自分が役に立っている」という自信を持つことにつながった。今後も地域貢献活動を通して地元の良さを発見したり、逆に改善点を見出したりしながら、「地域のために自分は何ができるか」を考え、行動することで地域への愛着心を形成、深化させていきたい。

6 広報・報道実績

（1）千葉日報（令和4年3月31日付け）



令和4年4月19日

朝日新聞

第3種郵便物認可

八街の交通安全に 地元の輪



①スーパーで作品を販売する生徒
②生徒が作って販売した、猫の形のまな板
=いずれも八街高校提供

プロジェクトはSDGs (持続可能な開発目標)も意識した。授業で作品を製作しても学校に置き忘れるなど、作品を使わずにいる生徒もいたため、使ってくれる人に販売した方がよいと考えた。材料は地元にある竹などを活用した。昨年12月〜今年3月、4

日間にわたり、学校近くのスーパーで販売した。用意した木製のまな板、木や竹のスプーン、フォーク、シルバーアクセサリーなどのほとんどが売れ、売上は10万円を超えた。熊谷裕希さん(17)は「はじめは不安だったが、『がんばって』などと温かい言葉をもらってうれしかった」。売上金は3月23日に市に寄付した。佐藤瑠音さん(17)は「八街のために寄付できてよかった」と喜ぶ。今後もプロジェクトを継続していくことを検討しているという。(伊藤麗利)

被害児童と同じ小学校出身者も

八街市で昨年6月に飲酒運転のトラックが児童の列に突っ込み、児童5人が死傷した事故を受け、地元の高校生が工芸作品を販売し、笑顔の輪を広げるプロジェクトに取り組んでいる。売上金は交通安全のために市に寄付している。

根絶!
飲酒運転

八街高校生が作品販売 売り上げを市に寄付

八街高校では昨年12月ごろ、工芸の授業を選択する生徒たちが「八街スマイルプロジェクト」を始めた。「事故で暗くなった八街を笑顔に」との思いを込めている。工芸の授業を担当する教諭の発案で、授業で作った作品を販売し、売上金を市に寄付して道路の交通安全に使ってもら

リーダーの1人、遠藤舜也さん(17)は「3年間は事故に遭った児童が通っていた朝陽小学校出身。事故を知り、『被害児童が妹や弟のように感じて悲しかった』と言う。身近に起きた大きな事故を受け、生徒約110人が賛同し、自分の作品を販売した。

SDGsも兼ねて地産品に

(3) 朝日新聞デジタル (令和4年4月19日付け)

朝日新聞
DIGITAL

飲酒運転死亡事故が起きた街、交通安全願い八街高生が取り組み

伊藤蘭莉 2022年4月19日 10時30分



スーパーで作品を販売する生徒=八街高校提供
📷



千葉県 八街市 で昨年6月に 飲酒運転 のトラックが児童の列に突っ込み、児童5人が死傷した事故を受け、地元の高校生が工芸作品を販売し、笑顔の輪を広げるプロジェクトに取り組んでいる。売上金は交通安全のために市に寄付している。

八街高校では昨年12月ごろ、工芸の授業を選択する生徒たちが「八街スマイルプロジェクト」を始めた。「事故で暗くなった八街を笑顔に」との思いを込めている。工芸の授業を担当する教諭の発案で、授業で作った作品を販売し、売上金を市に寄付して道路の交通安全に使ってもらう。

リーダーの1人、遠藤舜也さん(17)=3年=は事故に遭った児童が通っていた朝陽小学校出身。事故を知り、「被害児童が妹や弟のように感じて悲しかった」と言う。身近に起きた大きな事故を受け、生徒約110人が賛同し、自分の作品を販売した。

プロジェクトはSDGs(持続可能な開発目標)も意識した。授業で作品を製作しても学校に置き忘れるなど、作品を使わずにいる生徒もいたため、使ってくれる人に販売した方がよいと考えた。材料は地元にある竹などを活用した。

昨年12月～今年3月、4日間にわたり、学校近くのスーパーで販売した。用意した木製のまな板、木や竹のスプーン、フォーク、シルバーアクセサリーなどのほとんどが売れ、売り上げは10万円を超えた。熊谷裕希さん(17)=同=は「はじめは不安だったが、『がんばって』などと温かい言葉をもらってうれしかった」。宮川七色さん(17)=同=は「作品の販売は不安が大きかったが、地元の人とコミュニケーションがとれてよかった」といい、自身が作った組みひもも売れたという。

売上金は3月23日に市に寄付した。佐藤瑠音さん(17)=同=は「八街のために寄付できてよかった」と喜ぶ。今後もプロジェクトを継続していくことを検討しているという。(伊藤蘭莉)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.



スーパーで作品を販売する生徒
=八街高校提供



八街スマイルプロジェクトのリーダー4人、皆川七色さん（左端）は「作品の販売は不安が大きかったが、地元の人とコミュニケーションがとれてよかった」といい、自身が作ったミサンガも売れたという。

=2022年4月13日午後1時52分、八街高校、伊藤繭莉撮影

7/5 朝日新聞

投票所で受付体験 若者の投票率アップへ選管工夫 SNSに動画広告

10日に投票を迎える参院選に向け、県内の選挙管理委員会では、世代別でも投票率が低い若者に投票を呼びかけている。実際に若者に選挙事務を手伝ってもらったり、SNSに動画広告を出したりと、選挙を身近に感じてもらおう様々な工夫をこらしている。

「比例代表選挙です。候補者名または政党名を書いてください」
八街高校3年の斎藤勇太さん(17)は6月25日、八街市役所であった期日前投票の投票会場で、比例代表選挙の受付を体験した。
斎藤さんは「全部が初めて。投票を(選挙区と比例



八街高校の生徒が期日前投票の選挙事務を体験した。八街市役所

で)分けてやることも初めて知った。将来こういう風に投票するんだな、とイメージ

「シがわいた」。誘導係を担当した1年の山田千尋さん(15)は「日本の代表者を選ぶ選挙なので、緊張しました」と語った。

八街市では、投票日も含め、16人の高校生が事務を手伝う予定だ。市選管は「若年層の投票率をアップしたい。事務を体験することで、投票に関心を持ってもらいたい」という。

前回の2019年の参院選の投票率は、県内全体で約47%。一方、20〜24歳で約28%で、年代別で最も低かった。
県選管も若年層への投票

に力を入れる。今回の選挙では、初めて動画アプリの「TikTok」で動画広告の配信を始めた。15秒の動画では、「選挙を楽しみ、そんな政治参加もいいね。投票に行こう」と呼びかける。同じ動画をインスタグラムなどのSNSでも配信する。

県の明るい選挙のキャラクター「せんきよ君」のツイッターでは、6月22日の公示日から毎日、「投票日まであと〇日」とカウントダウンするし、投票を呼びかけている。県選管の担当者には「若年層対策がポイント。身近なところにアプローチして、選挙に関心を持ってもらいたい」と呼びかけている。
(伊藤蘭莉)

地域に貢献しようと、16名の生徒が八街市役所であった期日前投票の投票会場で、比例代表選挙の受付体験を行った。生徒達は、初めての体験に緊張しながらも市役所の方のアドバイスを受けながら受付業務を行うことができた。